

タイトル 「忘れ物の旅 ～父親の骨～」

著者 梶浦菊

あらすじ

菜々子は電車に飛び込み自殺をした父親の葬儀を終えた翌日、父親の喉ぼとけの遺骨が焼き場に忘れられていると連絡を受け、取りに行く事になった。その帰路、父親の死の真相を知る人たちと出会いこれまで見ない振りをしていた父への思いや母との思い出、後悔の念と向き合う事になる。

文字数 4998 文字

カンカン、カンカン……。

夜道の中、赤色の警告灯が互い違いに明滅していた。

傍らのスーパーや隣のレストランはすでにシャッターを閉めておいた。

女子高生だろうか。イヤホンを両耳に着けて自転車で踏切にのろのろ侵入しているが、まだ、警告灯に気付いていない。長い髪のがどうにも気になるようで、髪先をいじりながら、ふらりと踏切の中心に侵入してきた。踏切は、割合距離のある踏切だった。

ふらふらしていると言えば、路地から出てきた初老の男の足取りも覚束ない。一步二歩進んでは立ち止まり、後ろに後ずさる。良い酒の席だったのか口元にはやや笑みが見え、瞼はほぼ閉じかけていた。

辺りに他に人はいなかった。

轟々と音を立てて、もう、特急電車が見える位置まで近付いていた。女学生は髪先を気にし過ぎて、車輪を線路に取られて自転車ごと踏切の中央に転んだ。女の右の頬を電車の前照灯が照らした。

男は、はっと酔いが冷めた。目の前で若い女が電車に轢かれそうになっている。よせばいいのにこの男は、この男の人生に似合わぬ正義感をほとぼしらせて遮断機を潜って女子高生の元へまろび出た。

いよいよ電車の運転士も侵入者に気が付き大きな警笛の音が風圧のようにふたりを飲み込んだ。

男が女に手を伸ばしたところ、女はすいっと自転車を元に戻してさっと遮断機を潜った。若い女の咄嗟の反射神経は、電車のスピードを優に凌駕した。一貫してイヤホンを外していないこの女は、あろうことか男が自らを助けようと踏切に侵入したことにさえ気付いていなかった。

男は何かをつぶやいた。もし、近くに誰かがいたら、そう見えたかもしれない。

急ブレーキの鋭い音を立てて、電車が近づく。

カンカン、カンカン……。

※※

ガタンゴトン、ガタンゴトン。

神戸線の電車はのどかな規則音を立てながら、都市部を離れようとしていた。

菜々子は、車窓の変化を見ともなく見ながら、ずっといらいらしていた。平日の昼下がり、それほど多くない乗客とはいえ、ひとつでも座席が空けば座りたそうな者はいくらでもいた。そんな中、わあわあと幼児が母に駄々をこねていた。座席をゆうに3つ分は占めて、転がりながら泣き喚いている。母親は関せずといった風にその横に座ってスマホをいじっていた。

菜々子がいらいらしているのは、幼児にでも母親にでもない、自分にだ。

菜々子は、この幼児を見て「いやらしい」と思っていた。

あれは、泣き喚けばいつか誰かが構ってくれることを知っている振る舞いだ。菜々子はそれを見て、数日前の夜の自分の姿を思い出していらいらしているのだ。あの幼児が、ベッドの中であられもない声や吐息を漏らして男に媚びる、どうしようもなく下卑た自分に見えて仕方がなかったのだ。

唐突に車窓から水平線が見えて、菜々子はどきりとした。見慣れたコンクリートはどこ

でも同じだが、ただだっ広い海というのは、怖い。なぜだか菜々子は昔から”海”とか”切り立った山”などを見ると、泣き出す子供だった。

父親は死んだ。

つい昨日、茶毘と簡素な葬儀を済ませて東京に帰るはずだった。だが、葬儀屋から連絡が来て、引き戻されたのだ。最初は、冗談だろうと思った。お骨をひとつ、渡し忘れたという。骨壺の最後に入れる”仏様”を入れ忘れたというのだ。

焼き場を片づけていたら灰を捨てるゴミ箱に捨てられていたらしい。

最後まで、本当に父親らしい。この話を電話口で聞いたとき、菜々子はそう思っただけで笑ってしまった。

それを受け取りに土地勘もない場所を旅でもするかのように、父親の遺骨の入った骨壺と一緒に移動しているのだ。

菜々子と父とは、離婚の折に菜々子が母親に引き取られた 15 歳の頃から会っていなかったから、もはや他人に近かった。なんの縁があったのか、神戸で暮らしていたらしい。最後は自殺とのことだった。

葬儀には、ぼつりぼつりと数人の知人が現れた。ただ皆特に悲しむ様子もなく、義務を済ませるような様子でそそくさと帰っていった。菜々子のような娘がいたことに驚く様子は皆一様だった。

中にひとりだけ、菜々子の印象に残っている女性がいた。ワンピーススーツの喪服にベールの付いた帽子を被った正装の 70 代くらいの女性だった。

その女性から菜々子はスナックのショップカードを受け取っていた。

「落ち着いたら、ここに一度来て」

関西訛りの言葉で女性はそう言って、すぐに去った。おそらくそのスナックのママなのだろうその女性は、皺くちやで老いぼれてはいたが、背筋は伸びて足取りも確かでどこか母にも似ている気がした。

そのスナックには、行かないまま東京に帰るつもりだった。

火葬場では、担当者から社長までが菜々子の前にずらりと並び平身低頭で謝り倒された。菜々子は元々父親の遺骨になどなんの思い入れもなく、”喉ぼとけ”だろうが、もし許されるなら「そのまま捨ててください」と言いたいくらいだったのだ。だが、そういう訳にもいかないだろうから、こうしてわざわざ出向いただけだ。

小さい透明なパケ袋に入れられた父の喉ぼとけは半ば崩れていて、”仏さま”には見えなかった。菜々子が受け取ると、さらにみつつかよつと崩れてしまった。

※※

「おかえり」

菜々子が高校から帰って来ると、すれ違うように母は 2 階建てのアパートの外階段を降りて夜の仕事に出る所だった。

「冷蔵庫にご飯作ってあるから。チンして食べて」

「別にいらないうって言ってるじゃん」

菜々子は、ぶっきら棒に答えた。

「そんな事言わないで、ちゃんと食べるのよ。3食ちゃんと食べた方が太らないんだから」
「ダイエットじゃねえし」

にっこり笑った母は、押し潰すように菜々子のほっぺたを両手ではさむとぐりぐりと上下に動かした。菜々子は不機嫌な顔をされるがままたにされながら、母の手が異常に冷たい事だけが記憶に残った。

菜々子の母はこの日の深夜、レストランの洗い物の仕事を終え自転車に乗ったところで心筋梗塞で倒れ、そのまま目を覚まさず亡くなった。

菜々子は帰って来ない母を心配して外に出たが、いくら探しても母は見つからなかった。

菜々子は母を追い詰めた父を許す気にはなれなかった。だが、それ以上に自分が許せなかった。ずっと後悔していた。なぜちゃんと伝えなかったのか。なぜあんな風にしか言葉にできなかったのか。

「食事くらい自分で作れるから。もっと楽をして、お母さん」

言えなかった言葉は菜々子の胸にいつまでも突き刺さって、母の遺影の前でも涙は出なかった。

父は、母の葬儀にもついに現れなかった。

※※

その店は、父が飛び込んだという踏切の、ほど近くにあった。昼間に見るそのスナックは、明るい陽光を受けてひっそりと佇んでいた。

菜々子は意を決してドアに手を掛けたが、鍵が掛かっていてドアは開かなかった。白いモルタルの外壁は雨風で汚れて黒ずんでいた。ところどころひびが入り、うらぶれて、もし父のことがなかったなら一切関わりなど持たないだろうという外観だった。

「ママなら、あと1時間くらいで来はるで」

薄笑いを浮かべたおじさんが不意に話しかけてきた。菜々子が返事をする前にすでに手を掴まれていて、ぎょっとした。「新しい子か？」とにやついて話すおじさんは菜々子の手を揉むように撫でまわした。菜々子はすぐにその手を振り払い、逃げるようにその場を去った。

カンカン、カンカン。

いつの間にか菜々子は幅の広い踏切の傍まで来ていた。長時間閉じているのか、自動車が長く渋滞していた。その道端、ひとりの女性が踏切の路傍に花を手向けていた。スナックのママだ。

菜々子が近くまで寄ると、ママはまるで菜々子が来る事を知っていたかのように微かに笑みを浮かべた。ママの視線は自然に、菜々子の手元の骨壺入れに移った。

菜々子はなぜかこの土地に来てから初めて、ほんと安心したような気になった。

昼下がりのスナックは、まるで呼吸を止めた生き物のようにすべてが静かに動きを止めていた。窓のない暗い室内を灯す灯りも充分には設えられてはおらず、吊るされた弱い電灯が緩やかに舞う埃を照らし出していた。

「最後の日、ここにいはったんよ。幸一さん」

ママは目線だけで菜々子に座る椅子を指示して、奥に入った。

菜々子は素直にその椅子に座った。埃と煙草の煙が混じった匂いが充満していたが、なぜか嫌ではなかった。

室内の灯りが点いて、店内はやや生氣を取り戻した。衣装を変えて、ママがカウンターの中に現れた。「店、開けさせてね」と言ってカウンターの中の照明もふわっと明るくなった。

「ここ、出てすぐに事故になったんよ」

「事故？」

「ええ、事故。自殺やないわ、幸一さん」

「どうして、分かるんですか」

「だって、もうすぐ娘に会いに行くって、楽しそうに話してはったのよ。あの日」

「娘？ 私を？」

「あんたしかおらんやろ」

実は生前、何度か電話が入っていた。菜々子は、今更会うつもりなどなかったからずっと無視をしていた。

その時、陰気な顔をした男が店に入ってきた。話しは中断し、ママはその男をカウンターに座らせるとおしぼりとナッツを出した。まるで、今すぐにでも踏切に飛び込みそうな顔の男は、ビールを頼んで黙々と飲み始めた。

※※

大沢信一郎は、休職中だった。

電車の運転士をしているのだが、自分が運転していた電車で飛び込み事故があり、その光景が頭から離れず運転席に入れなくなった。

「しばらく休んでゆっくりすれば、元に戻る」と言われたが、信一郎には、とても元の状態に戻れるとは思えなかった。

男の最後の表情と、その時聞いた男の最後の言葉が脳裏から離れなかったからだ。

正確には男の最後の口の動きから、何を言ったかがはっきりと分かったのだ。信一郎には、はっきりと声が聞こえたようにすら感じた。

「忘れるなよ」

時間が経ってもこの呪いは解けないように思えた。だから信一郎にとって、休暇は意味がなかった。時間が経てば経つほど、男の呪いの言葉は重く、恐ろしくなってくるのだ。

信一郎は、とうとうこの呪いを解くための”死に場所”探しを始めた。そうして、最後の場所にあの踏切を選び、この日、その場所までやって来ていた。

陽が暮れ始めた頃、まだ最終電車までには大分時間があつた。信一郎は時間をつぶすため、踏切の近くにあつた誰も入らなそうな鄙びたスナックの扉を開けた。中には予想外にもう客がひとりいて、しかも女だった。

女はスナックのママと、なにやら深刻な話をしているらしかった。
信一郎は早く酔っぱらってしまおうと、酒のペースを早めた。

※※

「あの事故の日、『忘れるなよ』って娘に言わなあかんで、そう言うてたわ。幸一さん」
ママがそう言うのと、がしゃんと菜々子の横で音がした。ひとりで飲んでた陰気な男がグラスを手から落とした音だった。ママがすぐにタオルを持って近くに寄っても男はじつとママの顔を見たままだった。

「なんかついてます？」

「今、なんて」

「せやから、顔になんか……」

「『忘れるな』って、誰が言ったんですか」

「ああ、この間そこの踏切で事故に遭った人よ」

「ここにいたんですか？」

「ええ、事故の直前までね」

「娘さん？」

そう言うて男は菜々子を見た。

ママは次第に警戒して「あんた、誰や」と、男を睨みつけた。

「私はあの電車を運転していた者です」

そう言うて男は泣き崩れた。菜々子とママは言葉を失った。

信一郎は、幸一の最後を語って聞かせた。それが与えられた役割だと思ったからだ。

「『忘れるなよ』。そう、私の方を向いて言ったんです、最後。確かに。間違いありません。
私は、私の事を呪った言葉かと」

「その学生の子は無事だったんですか」

「ええ、すつと踏切から出ていきました」

菜々子はどうしようもないもやもやを抱えたまま、何も言えなくなった。

「それが」と、信一郎が骨壺を指し示した。菜々子が骨壺の入った包みをテーブルに置く
と信一郎は一心不乱に手を合わせた。

「あ」と、菜々子は声を挙げた。ポケットに入れっぱなしだった”喉ぼとけ”を思い出したの
だ。

ポケットからパケ袋を取り出して、骨壺の横に並べると、不思議な事にまるで座禅を組
んだ仏様のように見えた。

菜々子の瞳から急にぼたぼたと涙がこぼれた。

「ごめんなさい」と小さく呟くと、もう止まらず涙は嗚咽に変わった。

ママが背中をさすると、菜々子は子供のように泣き続けた。

何度も何度もふたりに伝えられなかった思いを声に出して、菜々子はその夜、ずっと泣
き続けた。

(了)